

「リーダーの役割」

阿部幸泰

主任：中間管理職

上司、部下から信頼を得るには、言動に「ぶれ」がないこと。

部下の指導

- ・教えるというよりは、部下の内面にある生きようとする自らに気づき、それを自ら育み、そのための考えるヒントを提示したり支援するという意識が重要。
- そうした係わり合いにこそ、部下の自主性、主体性、積極性が育まれる。

別紙（「指導」とは、導き方向を指し示すこと）参照

上司に対して

- ・主任は、部下と上司の単なるメッセンジャーボーイではない。
- 部下が判断を担う上司の声を聞いて貰いたくなるのは、当然。
- 共に上司に会い、共に進言することも必要（自分だけで処理しようと思わないこと）。
- 上司には組織の仕組みの難しさ（特に、予算を伴うもの）も多々あり、直ぐに部下の声通りには行かないのも現実。
- それだけに、部下と共に上司に話す過程の中で、部下も組織の仕組みを学び、何を改革することが必要かを理解し、そのために部下としてどうした行動が必要かを学ぶ。

プロの資質

- ・福祉、教育の現場の仕事には、ゴールもマニュアルもない。
- 係わるだけでなく、係わり合い続けること。
- 知識と技術に裏打ちされた知恵をいかに働かせるかのチャレンジ精神と、自らを検証する勇気が必要。

別紙（情報、知識、智恵）参照

スタッフ間の連携

すぐれた連携とは、まず情報を共有し、地位や立場とは関係なく、

- ①（担当のケースに抱く）個人的で感覚的な不安や感想も話題にできるような、ざっくばらんな雰囲気であることがとても重要。
- ②そのケースに関わる（保護者を含め）周囲の人たちが、お互いの大変さや内面の揺らぎを、仲間として支え合うこと。

「指導」とは、導き方向を指し示すこと

あるメル友から、【 障害児の保護者は一気に何でもできるようにならないとも思うので、私たちはサポートの役割をしていかなければならないのだろうと思います。 】とのメールをいただいた。

そこで、いつものように厚かましく次のように返信、アドバイスした。

【 よく、人それぞれ、親もそれぞれという人がいます。それを全て認めると、何も言う必要はなくなります。それぞれの状況が異なることを認めた上で、その親の置かれている状況からの歩む方向を指し示して上げることは、プロとして大事でないかと思います。若い保護者ほど、得ている情報は少ないかも知れませんね。

プロとは、ただ単に寄り添うだけでなく、その保護者の置かれている状況からの方向を指し示すことの出来る人でもあると思います。つまり、その保護者がどうした状況にあるかを見ぬき、どうした方向がさし当たり必要かを指し示し導くだけの教養、見識、知識、情報、等々の力量がプロに求められます。故にプロは、常に自らを錬磨、検証する姿勢が必要となります（未熟なだけに、周りに助けを求める勇気も必要です）。

私は、「指導」とは、強要でなく正に漢字の通り、「導」く方向を「指」で示すだけではないかと思っています。

もちろん、指し示した方向に納得できず、自らその方向に歩もうとしない保護者も当然いるでしょう。それはその時点での保護者の主体性であり、選択の自由でもあります。

しかし、プロから見て別な方向は先々子どものためには不味いのでないかと思うならこそ、更に寄り添い、保護者が主体的に納得・選択し、歩み始めるように導く作業の繰り返しが必要になると思います。

しばしば聞く言葉に、「保護者が同意しなかったので...」と、そこで係わりを切ってしまうプロが多いように思います。言い換えれば、自分の導く方向でなかったからと云って、私が常にいう「プロは、切ってはならない！寄り添い続ける覚悟をもて！」というは、こうした意味です。保護者のためのプロでなく、あくまでも子どもの存在、生活に対して支援出来るプロであるべきと思います。保護者によっては、その子どもの最適な選択をしているとは限りませんね。

障害児の場合、プロと保護者のこうした係わり合いのプロセスこそが、最近よく耳にする「地域で共に生きる（共生）」そのものでないかとも思っています。】

（2004年11月30日記）

情報、知識、智恵

「与えられる知識は応用が利かない。求める知識は智恵となる。」の言葉がある。「『人間よ、考えよ』の語りかけの意味...」の記載(バックナンバーマスコミ等コメント関係 P 2004/2/8: 参照)へいただいたあるコメントの文章を題材として、「情報、知識、知恵」の関係を私なりに解釈してみたい。

題材とする文章は、「これまで『ナチスによってユダヤ人が大量に殺された』ということを知ってはいても、あまり深くは考えてきませんでした。これから、どうしてユダヤ人は殺されなければならなかったのかなどを自分なりに調べて、二度と同じような悲劇が起こらないようにするにはどうしたらいいかを考えていく必要があると思いました。」である。

この「.....知ってはいてもあまり深くは考えてきませんでした。」は、情報としては知っていたということだろう。次に「.....自分なりに調べて、.....」は、単なる情報でなく、自分の求める知識への作業であろう。そして、次の「.....どうしたらいいかを考えていく必要があると思いました。」は、求めた知識を自身の考え方、自身の生活、自身の生き方に活かそうとする知恵への作業であろう。

現代社会は、マスコミ、書籍、等々から、有り余る情報は、日常見聞する。しかし、それは単なる「トリビアの泉」かも.....。情報を「自分なりに調べて(求めて)」、「どうしたらいいか(自らの思考・行動にどう活かすか)を考えていく」作業こそが、自らの智恵となるということであろう。

もっとも慎まなくてはならないのは、単なる情報を自ら調べて吟味もせず、降り注ぐ情報を鵜呑みにして自らの知識と錯覚することである。反面、情報に踊らされてしまいがちということになる。

私が、こうしてHPであれこれ発信するのも、マスコミからの情報を、文章化するという一つの行動を通して、私なりの知識・智恵を得たいというヒトの欲望の現れかもね。まあ、他の動物と比較してヒトは前頭葉が発達した動物と定義できるなら、いくつになっても「考える葦」でありたいですからね。

(2004年02月16日記)